

第一問

次の文章を読んで後の問いに答えよ

私たちの中学校にはコウモト先生という数学の名物教師がいた。コウモト先生の授業は非常にわかりやすいと評判で、合間合間に差し込まれる大学時代の思い出話や、有名な数学者に関する雑談はいつも私たちをワクワクさせた。コウモト先生は必ず白髪まじりの髪をかき上げなら教室に入ってきて、教壇から一番近くにいる生徒を捕まえては「お、君どうや、調子は」と聞くのであった。ある時教壇の目の前の席に座っていたナカムラ君が冗談ほく「全然だめです。もう今日は授業を受けたくありません」と言った時には「そうかそうか、ほな今日は先生が奥さんと出会った時の話でもしよか」と言ってその後五十分にわたって途切れることなく惚気話をし続けたこともあった。

「それで先生な、嫁さんと結婚したくてしたくてしゃあなくて、『俺と結婚したらこんないいことあるで』って冊子にまとめて嫁さんに提出したんよ。ほんならあいつ、『そんなことしなくても私にはあなたしかいませんよ』って言いよつてな、それで俺たちその勢いそのまま婚姻届出しにいったんやけどな。これな、どっちがプロポーズしたかわからんねん。せやろ、どっちもプロポーズっぽいことはしてるんやけど、どっちも結婚してくださいって言ってないねん。それでいまだに喧嘩になる。お前らはちゃんとプロポーズしろな」

先生は目尻に皺を目一杯に浮かべながら、とても嬉しそうにそんな話をするのだった。それから十数年がたった今でも、当時の友人たちと会う度にこの『伝説の五十分』の話になってしまう。

「俺がいなかったらあの五十分はなかったな」元凶のナカムラ君がそう誇らしそうに言うのを私たちは何度聞いたかわからない。兎にも角にも、私たちは皆、この先生が大好きだったのである。

コウモト先生はその親しみやすい人格に反して、とんでもなく難解なテスト作ることでも有名だった。数学が得意科目だと自認していた生徒が師のテストを前に心を折られるのを、私は何例見たかわからない。だから、中学二年の一学期の幾何の中間考査——平均点は確か四十点とかだったと思う——で私が満点を叩き出したことはクラスの中でちょっとした事件になった。

中間考査後の授業で答案が返却された際のことを非常によく覚えている。コウモト先生は生徒たちを教壇の横に並ばせ、一人一人に「なにやっとなねん」だの「今回のお前の答案面白かったわ。次も頼むで」と声をかけながら答案を返却していた。私も、自分はどんなことを言われるのだろうかとドキドキしながら順番が回ってくるのを待っていたのだが、いざ私を前にするとコウモト先生は破顔し、いつもよりもたくさんの皺を目尻

に浮かべて言った。
「ムラタ、お前満点や。すごいなあ」
私は「ありがとうございます」と返そうとしたのだが、コウモト先生の言葉を聞いたみんなが一齐に私の方を見たのを感じて、思わず消え入りそうな声になってしまった。それから自分の席に戻るまでの間、私は皆が口々に「すごい」「ムラタ数学できたんだ」「やるな」などと言うのを聞きながらも、顔を上げることができず終始俯いたままであったと思う。

そんな私に気づいていたかどうかはわからないが、全員分の答案返却を終えたコウモト先生は生徒たちを着席させると、目端で私を捉えながら「今回は満点を二人も出してもうた。そこにいるムラタともう一人5組の奴や。俺も衰えたな」などと、全く悔しくなさそうだったのであった。

「二人でも少なすぎますよ」

「ムズすぎるって」

「親にどう説明すればいいんですか」

生徒たちは口々にそんな文句を言った。まるで飼い主とじゃれ合う犬のようだと思った。

「ムラタ、お前数学得意だったんだな。今度教えてくれよ」

隣の席のヒグチ君はクラスの喧騒に背を向け、私の方に体を向けながらそう話しかけてきた。私はやっぱり照れ臭くて、中途半端にニヤついたら「またまたまだよ。またまた」と返した。

実際私は数学は得意な方であった。授業の内容はいつも何もせずとも脳みそに吸い込まれていった。面白い物語が自然に記憶されるように、あるいは学校までの通学路を自然と体が覚えるように、授業で聞いた定理・定義はまるで初めからそこにあったかのように私の脳内に蓄積されていくのであった。だから私は数学の勉強をしたことがなかった。いや、勉強の仕方が分からなかったのである。社会や理科であれば暗記というプロセスが必要になるのでおおよそ勉強の方針が定まるのだが、数学に関してはすでに頭の中に教科書の内容が染み込んでいる状態で何をどう勉強したらいいのか分からなかった。それでも八十から九十点程度は取れていたのだが、今思うと嫌な餓鬼である。

演習問題を解くという勉強の仕方があると知ったのはこの中学二年生の中間考査の時のことであった。クラスのお調子者たちがコウモト先生とからかい合っているのが羨ましかった私は、地味で無口な生徒なりに先生の記憶に残ろうと、初めて数学の勉強に本腰を入れることになった。その時初めて、教科書の章末に演習問題というものがついていっているのに気がついた。私は、数学以外の全ての勉強を放棄し、繰り返し何度もその演習問題を解き続けたのであった。

だから満点を取ったことでクラスの注目的となった私は、対外的には恥ずかしさを演出しながらも、心のどこかで『当然だろ』と思っていた

のだった。やはり嫌な餓鬼であった。

ニシヤマ君が私の教室に飛び込んできたのはその日の最後の授業が終わり、私が帰り支度をしていた時のことだった。「ムラタはいるか？幾何で満点取ったムラタを探している。ムラタはどこだ？」

前方の扉からイノシシよろしく教室に突っ込んできたニシヤマ君は、近くの生徒を手当たり次第捕まえてはそんなことを聞いていた。少し早口で喋る彼の声は同世代の男子よりワントーン高く、教室の壁を何度も反射しながら忙しく駆け巡り私の元にまで届いてきた。

「あの……、ここにいますけど……」廊下側から数えて二列目の後方の席にいた私は、力無く手を挙げながら囁きよりも少し大きいだけの弱々しい声でそう呟いた。その瞬間、未だ前方の扉付近で聞き取り調査に勤しんでいたニシヤマ君の首がぐいんとこちらを向いた。かと思うと横にいた生徒に「見つけたわ」と言い捨て、私めがけて机の間をずんずんと進んできた。それはまるで、歩きながら加速しているかのような勢いであった。

「お前、コウモトさんのテスト満点だったて本当か？」

「え、あ、はい。一応……」

「俺も満点だった。お前の答案を確認したい。見してくれ」

数年後聞いたところによると、この時のニシヤマ君は自分以外に満点の生徒がいると言うことが気に食わなかったらしい。それで、どうにかして私の答案から採点ミスを見つけてやろうと思いい立ち私のクラスに飛び込んできたのだと聞いた。

私は仕方なしにカバンの中から二つ折りにした答案用紙を取り出すと、それをニシヤマ君に差し出した。

「どうも」そう言ってニシヤマ君は私の手から片手で答案をひたたくと、もう一方の手に握っていた紙を「ん」とだけ言って私に向けて突き出した。あまりの勢いに、紙は空気の抵抗を受けクシャという音を立てながら反り返った。それはニシヤマ君の答案であった。

「間違っていないか確認してくれ」ニシヤマ君は口角一ミリも上下させることなく私に向かってそう言った。黒縁眼鏡の奥の目は虹彩と瞳孔の見分けがつかないほど真っ黒で、もしここでニシヤマ君の申し出を断ったらこの目が夢に出てくるのではないかとすっかり怯えてしまった私は渋々彼の答案を確認することにした。

コウモト先生の作る試験問題は少し特殊だった。ハガキくらい小さな問題用紙には、簡潔な言葉で一〜二行に収められた問題が三問、ちょこん

と記してあった。答案用紙はというと、いつも真っ白なA3のコピー用紙が一枚配られるだけであった。一度、誰かがコウモト先生になんで答案用紙が白紙なのかと聞いたことがあった。

「結果だけじゃなくて過程も書けと散々言ってきたんやけどな。どうしても皆んな結果だけ書きよるんよ。せやけど答案用紙を白紙にしてみたらな、何でか知らんけど皆んな答えに至った理由まで書いてくれるようになってな。考え方は合ってるのに計算を間違えただけで零点にするのは可哀想やろ。数学は計算じゃなくて考え方の学問やからな。」

先生が珍しく真面目に話し出したので、皆んなつい聞き入ってしまった。先生は一通り話し終わった後に「まあでも、実のところ問題用紙を作るのがめんどくさいだけなんやけどな。」と付け足したのだったが、私はそれが先生の本心ではなく、ただ空気を和ませるために柔らかい嘘をついただけだと感じていた。

そういうわけで、私たちはお互いの答案を確認し合うことになった。これはなかなか骨が折れる作業だった。特に、三問のうち二問が証明問題だったので、私はニシヤマ君の答案を一行ずつ丁寧に読み進めながら、論理に穴がないか確かめねばならなかった。

それは、精巧なロボットが描いた文章を思わせる答案だった。全ての文字がとめ・はね・はらいの規則をきっちり守っていて、尚且つ一切の乱れなく等間隔に並んでいた。行間は定規で測ったのではないかと疑うほどに正確に揃えられていて、数式の行は全て同じだけインデントされていた。

「お前、随分変な解き方をするんだな」ニシヤマ君が顔を上げずにそう呟いた。私は慌てて「え、どこか間違ってた？」と聞いた。

「間違っではないよ。遠回りなだけ。」ニシヤマ君はやはり顔を上げずにそういうと、再び黙ってしまった。

事実、ニシヤマ君の解答は明晰、明快、簡潔明瞭、最短経路にして必要最小限であった。余計な日本語も数式も一切なく、それは私の解答の完全なる上位互換というほかなかった。

「まあ大体合ってるな。減点するほどでもない」

私がニシヤマ君の解答を一問読み終えるか終えないかといううちに、彼はすっかり私の答案を読破してしまっていた。

「こっ、三角形CDFと三角形FGHの合同を言っているけど、これはいらぬな。二角が等しいことから残りの一角も等しいことを言えば十分だ。」

「え、どっ？」

「あと問三のここも変だな。ADとEFが垂直なことを言うだけ言っただけにも使っていない。紙の余白を無駄にしてるだけだ。」

「え、あ、ごめんなさい……」

「でもここはすごいな。ほらここ。こここの合同が使えることは僕も気が付かなかった。これはエレガントだよ。」西山君は一度も顔をあげることなく終始早口で捲し立てた。

私は、貶したり褒めたりと忙しいやつだと思っていた。そもそも論証の美しさや証明のエレガントさというものをこの時の私はよく分かっていた。いかなかったから、ただ訳も分からず自分の答案用紙が賞賛と非難の往復ビンタを喰らい続けるのを黙ってみているしかなかったのだ。ただ、時々裏返りながら早口で喋り続けるニシヤマ君は何だか楽しそうで、私はニシヤマ君が私を見つけられたことがとても幸運なことの様気がしていた。

(鷺ノ宮メジロ「ニシヤマ君について」による)

- (一) 「まるで飼い主とじゃれ合う犬のようだと思った」(傍線部ア) とあるが、どういうことか。説明せよ。
- (二) 「ただ空気を和ませるために柔らかい嘘をついただけだと感じていた」(傍線部イ) とあるが、どういうことか。説明せよ。
- (三) 「とても幸運なことのような気がしていた」(傍線部ウ) とあるが、どういうことか。説明せよ。